



美容医療を知る

—いま、この領域を志すあなたへ—

著 宮田成章

みやた形成外科・皮ふクリニック院長

中外医学社

序文

現代においては、多くの人は綺麗に、若くいたいと願うようになり、美容医療という分野が急激に発展している。レーザーのような気軽にその場で実施できる医療行為が主流となるにつれ、多くの人が気軽に受診するようになってきた。

それに伴い多くの医師がこの分野に興味を持ち、参入してきているが、これは単に美容医療が発展してきたというポジティブな理由だけではない。本邦では一般医療に従事する医師の仕事が過酷であり、病院勤務では給与も少なく、労働時間も厳しく、未来が見えなくなりつつある。患者はすぐにクレームを言い、訴えることも稀ではない。医師という仕事が尊いものではなくなり、モチベーションが維持されにくい。そのような状況ゆえ若い医師が「美容医療」という道を選択することも珍しくない。規制するという議論も盛んであるが、その場合に肝心の受け皿たる保険診療、社会保険制度が心許ない状況になっている。

若い医師だけでなく、保険診療に辟易としてきた多くの医師にとって魅力的に見える美容医療という分野は、一見簡単に参入できそうである。しかし美容といえども「医療」である。人体への反応を無視した治療はできない。リスクはつきものである。当たり前だが、それを最小限にするのは医学的な知識である。本書においては、美容医療の基礎知識を述べるとともに、現状を解説し、また海外の医師から世界の潮流を寄稿してもらった。さらには実際に活躍する若手、中堅、ベテランと対談し、この領域に参入した経緯や現状、アドバイスなど、貴重な意見を頂いた。

読み物のような形でまとめてあり、専門知識が一切なくても美容医療の成り立ち、現状や初歩がわかるように制作した。

これからこの領域に参入しようとする医師や医学生、そして現状に悩んでいる医師に向けて本書が少しでも役に立てれば幸いである。

2025年8月

宮田成章

2. 美容皮膚科の治療法

外科的手技を除いた美容皮膚科でできる治療法について述べる。
大きく分けて [Table 1] のような治療が行われている。

Table 1 美容皮膚科で行われる治療

-
- **機器治療**: 光、レーザー、高周波、マイクロ波、超音波、プラズマ機器 (energy based device)、冷却機器
対象 シミ (アザも含む)、シワ、たるみ
ほくろ、イボ
脱毛
ニキビやニキビ跡
瘢痕
赤ら顔
部分痩身
ワキガ
 - **スキンケア**: 化粧品、外用剤、各種導入機器 (イオン導入、エレクトロポレーションなど)、ピーリング (薬剤および機器)、針刺激 (マイクロニードリング)
対象 肌質改善、乾燥肌、脂性肌、小ジワ、ニキビ、くすみ
 - **注射治療**: ヒアルロン酸などのフィラー (充填材)、コラーゲン生成刺激製剤 (biostimulator)、ボツリヌス菌毒素、再生医療 (自己多血小板血漿、自己線維芽細胞)、サイトカイン、エクソソームや幹細胞、アミノ酸やビタミンなど
対象 シワ、たるみなど加齢性変化、隆鼻など輪郭形成、微量薬剤注入 (メソセラピー、水光注射) による美肌、育毛、脂肪分解など
 - **糸**: スレッドリフト
対象 たるみ
-

機器、スキンケア、注射、糸に大きく分けられる。機器のうち何らかのエネルギーを有するもの、つまりは光を含む電磁波 (高周波やマイクロ波)、超音波など物理的に熱や振動などのエネルギーを与えて組織に何らかの器質的な変化をもたらすものを energy based device (EBD) と称することが一般的である。多くの場合熱エネルギーに変えて対象物を破壊、もしくは刺激する。破壊は除去を目的としたものもあれば、創傷治癒機転を生じさせて再

8. 美容皮膚科のビジネス

美容皮膚科の治療は一見簡単であり、参入障壁も低い。現時点では皮膚科や形成外科の専門医以外の医師のほうが多い現状である。ただこの点に関して無条件に参入を認めるかどうか、国の指針も徐々に変化しつつある。さまざまな制限がかかり始めており、これから数年でもそれらは厳しくなっていくであろう。

医師以外がさまざまな施術を行えるという、日本の特殊性も徐々にグローバル化していくかもしれない。その一つに美容医療がビジネス化しやすいということがある。保険のきかない自由診療であり、機器や注入などの結果よりも何があるか、その「道具」に焦点が当たりやすい。たるんでいるから治してほしいという患者もいるが、HIFU (high intensity focused ultrasound) 治療を受けたい、そう患者が思っただけで来院することも多い。例えばがんであれば治療法をまず聞くよりも、治るかどうか、入院は必要なのか、何年くらいかかるのかなどに焦点が当たり、放射線で治してほしい、などが先にくることはあまりない。あったとしてもそれは治療に難渋したり、医師に厳しいメンテラをされて、調べたうえでこれが良いと薬にもする思いで相談するのである。治療法ファーストではない。美容医療では治療法に各院がさまざまな値段をつけて、患者がそれも含めて吟味して受診を決める。医師側だけでなく患者側も含めたビジネスが成り立つ、お互いそれをわかったうえでの治療である。もちろん患者側が医師にお任せしますということもあるが、一般医療としては患者選択権が大きい。クリニックの評価が医師の質だけでなく、どのような機器を持っているのか、また立地や価格などに左右されるのである。

アップセル

美容医療において売り上げはとても大事な要素である。保険診療と異なり、治療費は自らが決めることができる。腕が良ければ、自信があれば高額

13. 長期的に考えていますか～安全性～

美容医療の領域では結果がすべてである。新しい治療が登場し、素晴らしい結果を目にするとついつい導入したくなる。しかしあまりに画期的なものは曲者である。理論的にそれが正しいのか、何か裏はないのか、考えていかなければならない。特に副作用は常に意識する必要がある。

もちろん副作用のない治療法はほぼない。ヒアルロン酸の注入療法であってもアレルギーはもちろんのこと、血管内に入ってしまったて塞栓を生じ、皮膚が壊死したり、最悪の場合失明や脳梗塞を生じるケースも報告されている。誰もが起こしうるトラブルであり、細心の注意を払わなければならない。

そして、歴史の項でも書いたように、わが国では注入材によるトラブルという悲しい過去がある。製剤が販売された当初はまったく問題なく、数年たってから大きなトラブルとなったのである。短期的なものはアレルギーとして腫れ、炎症などになるが、長期となると周囲に強い線維化が生じる。固形物質のシリコンなどは周囲に強い被膜を作り硬くなっていくので、原因物質を取り出すことで対応できるが、注射によって注入したものは正常組織に浸潤するため、線維化が正常組織と絡み合って除去が困難である。この線維化はコラーゲンの増生であり、効果と副作用は紙一重である。短期的な結果が優れていても慎重に見極めなくてはならない。そして同じ物質でも医師によって意見は分かれる。

最近では biostimulator、コラーゲンブースターと称される薬剤や各種の成長因子、エクソソームなどさまざまな物質が登場してきたが、これらはすべて注入技術や頻度、層、濃度などによって有益にもなるし、合併症にもなるのである。そして安全性は長期には誰も知らないものが多い。世界中でこの国も承認していない製剤がわが国では流通していることもあるし、なんの許可も得ていない、医薬品としての製造許可を得ていないラボで作られたいわゆる試薬が、なぜか効果効能が謳われて、パンフレットまで作られていたりする。販売する企業、輸入代行をする業者は基本的には無責任である。安全ですと言って輸入代行をし、トラブルが起こったら輸入を止めるだけで、責任はすべて医師にあるということになる。使うのはダメとは言わない

地方開業医の視点から

野口博光 宮田成章

宮田成章先生（以下、宮田） オフィシャルな場でお話しするのは、
なんだか不思議な感じがしますね。

本書の読者に向けて、地方で皮膚科を開業され、一般保険診療に加え
てレーザー治療などを取り入れている先生のお話を伺いたいと思い、
大学同期の野口先生にお願いしました。

まずは、野口先生のご経歴とクリニックについてご紹介いただけます
か？

野口博光先生（以下、野口） はい。もともと私は皮膚真菌症を専門
としており、防衛医科大学校を卒業後、自衛隊で水虫の研究をしてい
ました。それは現在も続けています。

2004年にビル診で開業しましたが、その際、ルミナス社の脱毛機「ラ
イトシェア」とフォトフェイシャル（IPL）を、それぞれ1200万円
と850万円で導入しました。きっかけは、銀行の担当者から「皮膚
科は美容も手がけるべきだ」と助言されたことでした。

その後、近隣の皮膚科クリニックがエステティシャンを雇わなくな
り、看護師による施術に移行しました。そこを退職したエステティシ
ャンから雇用をお願いされたことを機に、エンピロンのイオン導入を
はじめました。

さらに、開業から18年たったタイミングでクリニックを増築し、そ
の際にキャンデラ社の脱毛レーザーを2台導入しました。また、イ
オン導入は中止しましたが、肌の張りを改善するハイドラフェイシャ
ルとヴィーナスビバを採用しました。加えて、宮田先生に勧めていた

3. 実際の機器治療

さまざまな疾患、改善目的に対してどのような治療を行うのか一般論を述べる。

ほくろなど皮膚腫瘍

赤外線波長である CO₂（炭酸ガス）レーザーや Er:YAG レーザーを用いる。水に吸収される波長のレーザーを高いエネルギーで用いることで組織が蒸散する。これによって組織を非選択的に削っていく。ただし、あまり深く削りすぎると瘢痕を生じる。深度のあるものは熟練を要する。また蒸散作用だけではなく熱凝固作用もあるので、止血することが可能であるが、この熱作用が削った以上に強い瘢痕を生じるリスクとなる。一般論として CO₂ より Er:YAG のほうが水への吸収率が高く、蒸散がほとんどで熱凝固作用が少ない。ほくろの治療はメスで除去したほうが再発が少なく、また優れた縫合技術がある外科医であればレーザーを使う必要がないとされてきたが、近年では顔面であればほとんどの医師がレーザーで治療を行う。

最近ではむやみに深く削って瘢痕を生じさせるのではなく、CO₂ レーザーなどである程度蒸散させた後は Q スイッチアレキサンダライトレーザーなどでわずかに残る色素を破壊して仕上げることも多い [Fig 12]。

シミの治療

シミは老人性色素斑が主たるものであるが、異常なメラニンを含む表皮細胞を破壊することで治療する。削り取ったりして治療することも可能ではあるが、瘢痕や恒久的な色素沈着を生じてしまうリスクがある。そのため主にメラニンに吸収されやすい波長のレーザーを用いることが標準的な治療である。ルビーやアレキサンダライトレーザーの波長はメラニンに吸収されやす